

# 図書館車の窓 79

## 新しい図書館車の紹介

### セミバス型

ラブック号 浜田市立浜田図書館 (島根県)  
 日野 2.0t 4WD  
 右内架/左内外架式 (木) 積載冊数1,600冊



### セミバス型

かもしか号 岩泉町立図書館 (岩手県)  
 いすゞ 3.0t 4WD リフト  
 内外架式 (木) 積載冊数3,100冊



# 「寄贈図書館車の南アフリカ向け出港式」挙行



NPO Sapesi(南アフリカ初等教育支援会、蓮沼忠理事長)が進めている「教育用図書館車」を南アフリカへ寄贈する活動の第一陣、全国の公共図書館から寄贈された12台の「寄贈図書館車の南アフリカ向け出港式」が、2009年10月1日東京・晴海埠頭特設会場で挙行されました。「出港式」には、外務省、駐日南アフリカ共和国大使館はじめ、寄贈元の自治体図書館等、関係者多数が出席しました。

NPO Sapesiは、南アフリカ共和国文部省と提携し、日本で不要になった中古の図書館車を譲り受け、南ア各州の教育庁に無

償譲渡し、図書室のないスラムや田舎の小学校を巡回してもらうことで、移動図書館車による図書普及活動を行っています。(小誌72、73号に、蓮沼忠「南アフリカで活躍する日本の図書館車」を掲載しました)

NPO Sapesiが、在南アフリカ共和国日本大使館を通じて外務省の草の根資金の援助を受け、社団法人日本外交協会と連携して呼びかけ、各地方自治体から寄贈を受け、集められた移動図書館車は、商船三井によって海上輸送され、南アフリカ共和国で“第二の人生”を始めます。

今回の“第一陣”12台は、次の通りです。西ケープ州へ(3台): さいたま市「こだま号」、岩手県山田町「はまなす号」、天理市「はるか号」。フリーステート州へ(4台): 川越市「やまぶき号」、名寄市「やまゆり号」、鳩ヶ谷市「さわやか号」、赤穂市立図書館「ちどり号」。クワズルー・ナタール州へ(4台): 岩手県一戸町「そよかぜ号」、徳島市「いずみ号」、町田市「そよかぜ号」、和歌山県かつらぎ町「ふれあい号」。ハウテング州へ(1台): さいたま市「しらさぎ号」。

なお、NPO Sapesi(南アフリカ初等教育支援会)が、初の出港式を記念して作成した「寄贈された移動図書館車12台のエピソード」集を、本号より順次紹介していく予定です。



勢揃いした12台の移動図書館車

## も く じ

新しい図書館車の紹介 浜田市・岩泉町	1頁
寄贈図書館車の南アフリカ向け出港式	2頁
南アフリカへ寄贈された移動図書館車のエピソード集 ①	3頁
図書館の風に吹かれて その7 梅澤幸平	4~5頁
移動図書館と共に歩んで 第1回 藤澤和男	6~8頁

## 南アフリカへ寄贈された12台の移動図書館車①

— NPO法人 Sapesi-Japan編集「地域密着で長年に渡り活動した移動図書館車のエピソード」からの転載

### さいたま市岩槻図書館「こだま号」→西ケープ州へ



#### 《エピソード》

拝啓 時下、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、このたび本市寄贈の移動図書館車が、南アフリカ共和国へ出港する運びとなりましたこと、まことにうれしく存じます。

本移動図書館車は、「こだま号」の愛称で長年親しまれました。これには、郷里の儒学者「児玉南柯」にちなみ、移動図書館がこだまのように広まってほしいとの願いがこめられております。昭和50年10月に市内16箇所において巡行を開始し、平成12年には21箇所の巡回へと広がりました。多くの市民の皆様にご利用いただいておりますが、排ガス規制により惜しまれつつ廃止となりました。

日本外交協会並びにSapesi-Japan様のご尽力により、新たな活動の場所が決まり、職員一同安堵いたしております。今後は南アフリカで学校巡回図書館として活用されるとのこと。この活動がこだまのように広がり、多くの子供たちに夢を与えられることを期待しております。

敬 具

さいたま市立岩槻図書館館長 三村 昇

### 岩手県山田町「はまなす号」→西ケープ州へ



#### 《エピソード》

岩手県山田町の移動図書館車は、愛称を「はまなす号」と命名され地域の方々から愛されました。長い年月、1,500冊の本を積んで運びました。「はまなす」は「山田町の花」として制定されている花の名前です。

図書館から遠く離れた地にある人は、月に1度の訪問を心待ちにしておりました。一度でも行けないことがあると、とても悲しく思い、行けなかった理由を何度も何度も聞かれました。本を読むことが人生の大事な糧となっている人が多くいることを感じました。特に高齢の方、病弱の方、自動車の運転のできない方は、移動図書館車から借りる本を読むことは生活の大事な一部となっております。

「はまなす号」が南アフリカ共和国に行っても多くの方々に夢を運び、役立って欲しいと願っております。

平成21年9月14日

山田町図書館 元館長 菊池 新一郎



## 図書館の風に吹かれて その⑦

### ≡ 図書館で巡り会った人たち ≡

前滋賀県立図書館長 梅澤幸平

図書館の仕事をしているといろいろな方と出会う機会が多い。図書館はあらゆる職種の方が利用される。加えて年齢層は子どもからお年寄りまで幅広く、実に大勢の住民と接点を持つことになる。人口4万人の町でも延べ入館者数は30万人近くになり住民の普段着の姿を一番知っているのは図書館員ではないかと思う。また様々な行事などの展開とともに地元のグループとの交流も深まりさらに輪は大きく広がる。

甲西町の図書館づくり運動の先頭に立って進めてくださった、当時IBMの社員で町会議員だった関治夫さんやその運動を支えていた草の根文庫の方々のことを、第一に思い出す。着任してまもなく関さんらこのメンバーでドライブインを貸し切って歓迎パーティーを開いてくれた。50人くらいの文庫関係者に混ざって、図書館側からも当時県立図書館の図書館振興担当だった岸本現県立館長や、近隣の八日市立図書館の西田館長らも駆けつけてくれた。西田館長は歓迎の花束を家内に贈呈してくれた。初めてもらった花束で家内はそれ以降すっかり西田館長ファンになったのは言うまでもない。

この歓迎の場に文庫の仲間として黒一点お年をめした方が参加していて、実直な人柄をにじませて「図書館ができるのを楽しみにしています」と挨拶されたのが徳山先生だった。この時西田館長には「館長としてのこれからの決意表明を述べろ」と煽られたが、「日本一の図書館を作ります」などと大言壮語するつもりはなく、しっかりと皆さんの期待に応える図書館を作りたいと緊張しながら挨拶をした。後で知ったが徳山先生は県立高校長など歴任され、地元の文庫のお世話もし、公民館等で「源氏物語」講座の講師もされ、また町の文化財

保護協会会長の要職もされて「徳山先生」と呼ばれる地元の名士だった。開館後は先生に図書館協議会委員をお願いし私の在任中10年間支えていただいた。先生は偉ぶったところがなく、誰に対しても丁寧に接する方だった。息子ほどの年齢差があるにもかかわらず、若輩館長の私にも敬意を払ってくれて、こちらは身が引き締まる思いで、いつもその態度から教えられた。

その徳山先生が文庫の図書交換の際に同行されてきたのが、平意さんだった。平意さんは図書館に置かれた紙芝居に大いに関心を示した。昔、紙芝居をやっていたという。「えっ！紙芝居屋さん」と聞くと、あわてて手を振り「そうではない」という。戦前からの郵便局員で戦時国債の販売促進のために、国から配布された戦意高揚の紙芝居の上演を通して国債販売の仕事を担当していたという。それがきっかけで紙芝居好きになり、個人でも購入して地元のお寺などで子どもを集めて上演していたと当時の様子を語った。では古い貴重な紙芝居をお持ちなのですねと聞くと、「いや終戦の時に全て焼いた」という。鬼畜米英などといった戦意高揚の紙芝居を所有していたので、占領軍に捕まると家族や周りから言われ裏庭で燃やしたのだった。「残念だな、是非見たかった」と話を進めていると、国債ものはないが、実はその時に自分で収集した紙芝居を一部焼かないで、誰にも言わずに隠し持っていると言を響めていう。「もう大丈夫ですよ」とグアム島から日本兵・横田庄一さんの救出を試みている時ってこんな気持ちかなと思いつつ、「皆さんに図書館で是非見てもらいましょう」と公開を勧めた。そして戦後初めて上演されたのが「安南の花嫁」というベトナムを舞台にした悲恋ものの紙芝居だった。

これを皮切りに、平意さんの紙芝居をもう一度見たいと言う要請が起こり、各地でひっぱりだこになり、町内から郡内、郡内から県内へと活躍の場が広がっていった。とうとう厚生省が主催していた定年後の第二の人生を充実させた人々の全国大会にも県代表で参加し、大臣表彰もいただくことになった。そのたびに「館長のお陰です」といって報告に来られ、大いに恐縮した。

町長の代理で出かけた敬老会で、「図書館員の対応がいいね」と声をかけてくれたのは昔、名古屋で本屋さんを営んでいた水谷さんだった。本屋さんから「いい図書館だ」とお褒めの言葉をいただき、嬉しかった。控えめな方でそれ以上の深いおつき合いもなかったが、ある時無理を言って職員の研修の講師になってもらった。水谷さんが本屋をどのような視点で運営されてきたかを参考にさせてもらいたかったからだ。緊張気味な水谷さんは、開口一番、本屋の話からではなく、自分は「希望」というものを打ち消して生きてきたと、かつてシベリア抑留体験者だった過去から語りはじめた。シベリアでは帰国という淡い希望を何度も打ち消され、そこから学んだのは希望を持つと落胆するから、成り行きに身を任せ積極的に生きない処世術だったという。召集前は電気関係の技術屋さんだった水谷さんが本屋になったのはシベリア帰りとして、職がなく成り行きで始めた商売が小さな本屋で、規模は小さく私の話は参考にならないでしょうと、どこまでも謙虚だった。戦後半世紀を経てもシベリアの傷跡の深さを改めて思い知らされた。

開館4年後に貸出100万冊目の利用者になったのが、秀ちゃんという5歳の男子だった。いつもご両親と3人で利用してくださっていてこの日に巡り合った。それ以降、図書館で会うと声をかけて話をした。私が2000年に県立図書館長に転出する時は中学生になっていたが花束を持ってお別れにきてくれた。その後大学に進み社会人になったが年賀状のやり取りは今も続いている。町に図書館ができてから育った第一世代だけに、その頃出入りしていた子供達は思い出深い。図書館の近所のわ

んぱく坊主だったターちゃんは図書館でときどき騒いでいたが、その子の友達から「あいつ大きくなったら図書館長になりたいんだって」と聞いて、急に可愛らしくなり、あまり怒れなくなった。今は図書館員にはならなかったが立派になり図書館の前を澄まして通勤していて、昔を思い出して職員はほくそ笑んでいると聞いた。

塩谷さんご夫婦は、開館以来日曜日に夫婦でそろって図書館を利用してくれていた。顔なじみになって、いろいろと話すようになって伺ったのは、ご主人の定年時に、大阪に戻っておいでという息子さんの誘いを断って「老後は図書館がいいところに住みたいから、ここに永住する」と宣言して終の住処を甲西町に決めたということだった。これを聞いて職員ともども期待にしっかり応えなくてはと図書館の仕事に携わる意義を感じ、心新たにした。

ある日、突然図書費に役立ててと100万円の寄付を申し出てこられたのは、会社経営者の高井さんだった。館長室で初めてお会いした時に、購入する本に特に希望はありますかと尋ねると、「図書館で選んだもので結構」という。高井さんは脱サラして起業したが行き詰まった時に、ふと手にした本が「走り高跳び」のそれまでの主流の跳躍法「ベリーロール」から跳び方を180度変換させた「背面跳び」を紹介したスポーツの本だったという。この逆転の発想がヒントになり壁を乗り越えて、今日の会社の繁栄につながったという。経営に役立つのは経済書とは限らない。いろいろな本があって初めて様々なニーズに対応できるのであり、図書館で広く本を収集するためにこのお金を役立てて欲しいといわれ、本の値打ちをよく知っている高井さんのこの言葉は、心の中に強く残った。昨今はビジネス支援など特化した図書館サービスが喧伝されるが、図書館は何をすべきところか示唆に富んだこの出来事を教訓にしてもらいたいと強く思う。(続く)



## 移動図書館と共に歩んで 第1回

前日野市立中央図書館長 藤澤和男

### はじめに

退職までの30数年間、1度の異動も無く図書館で仕事できたことは幸せであった。日野市役所の職員になったというよりも日野市立図書館に就職したという意識のほうが強かった。そのために就職してしばらく経った頃、役場の宿直当番がめぐってきたときには驚いてしまった。自分も市役所の職員だったのだと。そんな私が日野市立図書館に長くいたことで、どれだけの「負債」を図書館に負わせてしまったのか、移動図書館の歴史を辿りながら「反省」をしてみたい。

私が日野市立図書館に勤めたのは図書館が設置されて8年目の年の1973年である。この年には中央図書館も完成し図書館全体が若々しい力で満ち溢れていた時であった。

出勤初日、前川恒雄館長から応接室で待つように言われ、緊張して待っていた。やがて部屋に入ってきた館長が最初に語った次の言葉を今でもよく憶えている。

「君に手取り足取り仕事を教えるほど時間的余裕のある職員はここにはいない。仕事は自分で覚えるよう努力し、先輩の仕事振りをよく観て学ぶように」

この一言で、仕事に向かう厳しさがひしひしと伝わり、自分は明日から出勤できるかと真剣に心配になった。たった6人で出発した職員数も23名になった年である。

第1回目の今回は前川館長の著作である「移動図書館ひまわり号」（1988年刊）を手がかりに、日野市立図書館誕生を辿ってみよう。

### 中小レポートの発刊

「中小都市における公共図書館の運営」という長い題名を持つこのレポートの作成は、日本図書館協会の事務局長で日野出身でもあった有山崧氏の発案で1961年に始まった。当時の惨憺たる状況の日本の図書館を建て直すための運営の基準作りが目的だった。前川氏も加わって1963年3月にレポートは完成した。このレポートは、周知のとおり日本の公共図書館に計り知れない大きな影響を与えた。ただ当時はこのレ

ポートの数値や考え方が、あまりに現実離れしたものであったので「誰かが『中小レポート』の正しさを実際に証明しなければ」という重い課題が残ったとある。

### 日野へ

前川氏がイギリスでの研修を終えて日本に戻ってきた年（1964年）の秋、有山日図協事務局長は、日野市の社会教育委員会議長に委嘱された。その関係もあって1965年3月、前川氏は有山氏から日野での図書館作りを持ちかけられた。しかし、「中小レポート」に基づいて作ろうとしている図書館が「それまでの日本に無いものだったし、市民の常識から相当かけ離れていた」ために、はたして受け入れてもらえるのか、強い不安を抱えながら前川氏は日野に向かうことになった。

1965年4月1日、前川氏は日野市職員の辞令を受け取った。その足で庁内の幹部職員に挨拶まわりをした折、時の総務部長に「市が図書館を作ることはないよ。都立図書館を誘致すればいいんだ」と言われたとある。その年の3月には、図書館設置条例案が継続審議となって6月議会に持ち越されており、決して市をあげて図書館設置に向かっていたわけではなかったようだ。図書館ができるかどうかははっきりしない中で「今後どうすべきかあれこれと考え、考えに考えて」到達した結論は、「移動図書館1台だけの図書館」だったと前川氏は書いている。

### 条例制定と図書費

「図書館は中央館と分館によって構成される」、「館長は経験のある専門職でなければならない」などを骨子とする条例案の議会審議では、建物のない「移動図書館1台だけの図書館」が一体どういうことなのか、なかなか理解されず「審議は難航」したとある。確かに条例文に「図書館は中央館と分館によって構成される」とあるにもかかわらず、建物は影も形も無いというのでは、かなり異例ないわば「精神条例」であ

ろう。普通ならば可決はむずかしいところであるが、ともかく館長の「熱心」な説明が議員の心を動かし、6月20日に条例は公布され日野市立図書館の設置が決まった。次は予算である。

日本の公共図書館の諸悪の根源が、図書費の少なさにあったと考えていた前川氏は、「中小レポート」に示された基準にそって500万円の図書費を計上した案をもって財政課との交渉に臨んだ。当時の近隣の市立図書館の図書費を見ると武蔵野市（当時人口12万5千人）で95万円、府中市（人口11万1千人）では140万円であった。（当時日野市人口約7万人）

このときの財政課とのやりとりは、実に興味深い。前川館長の予算説明が一通り終わったあと財政担当の一人が

「図書費はたった500万円でいいんですか」

この質問に前川館長は次のように述懐している。

『私は耳を疑ったが、この人はよほど太っ腹なのか、他市の状況を知らないかなのだろうと思って、さらに質問に答えていった。そのうちにはっと気づいた。この人は、図書館は一度本を買えばもう未来永劫買わなくてもいいと思っているのだ』

「この図書費は毎年必要なのです」

私が言ったとたん、全員が黙りこんでしまった。

このあと、財政課は図書費を含めて500万円（これでは図書費は半分以下になってしまう）とした案を示すのだが、とても承服できず市長への直談判も辞さないとする館長の気迫に、財政課長は市長に相談、当時の古谷市長の英断によって、館長案がそのまま認められることとなった。財政課としても市の事業のどこにどれだけの予算を回さなければならないかについて充分検討し、決して潤沢ではない予算の中でぎりぎりの案を各課に示すわけである。したがって気迫だけで予算案の変更がなされる訳はなく、前川館長の精緻な説明がその土台にあってのことである。前川氏は、「古谷市長のこの決断が、日野市立図書館の将来を決定した」と書いている。そして結局、図書館スタート1年目の1965年度は、総額1,167万円、うち図書費は500万円余りとなった。

#### スタート時の職員体制と事務所

7月には職員6人が任命された。館長、副館長に職員4名である。事務所は市役所から少し離れた小学校体育館の控

室も兼ねた30平方メートルほどの小部屋であった。この部屋には電話も湯沸しの設備もなく、お茶は少し離れた市役所の用務員室までやかんを下げてもらいにいくという毎日だったと書いている。

しかしこうした中で新しい図書館の出発に向かって、生き生きと準備作業が始まったのである。本の選定・注文・受入・分類そして目録カードの作成や納入された本へのカバーかけなど日常の業務を館長以下6人全員でこなし、さらに図書館利用規則や図書館組織などを定める諸規則の制定、移動図書館車の設計、巡回場所の選定など目のまわるような忙しさだったに違いない。

#### 巡回場所の決定

どこの場所に巡回するかは図書館利用を盛んにする上で重要であるが、当初は「市民が求めるのならどこへでも行く」を方針にして、市民が来てほしいところだけに巡回をすることにしたという。市の広報で巡回場所を募り、37カ所が決まった。前川館長が中心となって設計した初代移動図書館車は1965年8月末に納車され、社会教育委員による選考で愛称は「ひまわり号」



初代のひまわり号

まわり号」となった。毎日日野を回ることからつけられた名前である。

### いよいよスタート

図書館事務所を置いた市立集会場には移動図書館車を停めて置く場所もなく、また開館に向けて準備した本も置き切れなくなったため、サービス開始前のあわただしい最中の9月、七生支所に引っ越すこととなった。そしてここで日野市立図書館がスタートする9月21日を迎えることになった。



1966年増車された2台目ひまわり号

### サービス初日の様子

巡回に先立って移動図書館車の安全祈願を高幡不動尊で行なった。車の安全というより「図書館そのものの安全祈願であったような気がする」と前川館長は述べているが、まさに日野市立図書館の旅立ちと日本の図書館の新しいあり方はこの祈願によって叶えられたのかも知れない。

巡回日誌によれば、初日9月21日火曜日は晴れて、4カ所を巡回している。そして図書館利用登録者数は189名、貸出し数322冊と順調なスタートを切った。

### 編集後記

盛会裡に挙行されたNPO Sapesiの「寄贈図書館車の南アフリカ向け出港式」をお慶びいたします。写真を提供いただき、「南アフリカへ寄贈された移動図書館車のエピソード」集からの転載を快諾くださったNPO Sapesi-Japan武藤豊事務局長に感謝いたします。

本号から、前日野市立中央図書館長藤澤和男さんの「移動図書館と共に歩んで」を連載し、日本の図書館活動に新世紀を拓いた「ひまわり号」の40年余の歩みをふりかえっていただきます。どうぞご期待ください。

梅澤幸平前滋賀県立図書館長の連載「図書館の風に吹かれて」は7回を迎えました。連載当初は5回位を目処にとおもっていましたが、披露される話はいずれも興味深く、さらに継続をとお願ひしています。引き続きご愛読ください。(編集室)

## 《軽くて丈夫で便利なノ ハヤシダ特製の折りたたみアルミ書架・机》

3段両面キャスター付  
H1,220×D110×W765に格納 折りたたみ12kg

業務開始は迅速  
H約670×D約400×W約1,500

定価 80,000円・60,000円(価格・送料等の御相談は林田製作所へ)

編集 『図書館車の窓』編集室 東京都八王子市大和田町6丁目13番地35号

(〒192-0045)

発行 自動車特種車体製作株式会社 林田製作所 埼玉県さいたま市見沼区上山口新田56-1

(〒337-0044)

印刷 有限会社 印刷のシコー 石川県白山市八田町367番地

(〒924-0001)

☎042(642)4839

FAX042(642)4839

☎048(683)2250(代)

FAX048(684)6292

☎076(275)3135(代)

FAX076(275)7137